COMBAT
コンバットマガジン
Apr.,2019
No.517
4

Cover Illustration
M. Kelly（Satoshi Okada）
ⓒ WORLD PHOTO PRESS 2019
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

015 ベトナム航空戦 MiG KILLERS

004 LRRP Indiana Rangers インディアナ レンジャーズ
ジャングルを駆ける開拓者魂 by Jay Borman

012 第6回サイゴン物語 Saigon Memories
Hoa Lo Prison 黄色のしゃれた地獄

067 WESTERN ARMS
COLT GOVERNMENT MkⅣ SERIES '70 GUN BLACK Ver.

070 WESTERN ARMS
RETURNER. 38CUSTOMREAL STEAL Ver.

074 速報!! 2019 SHOT SHOW
●Report by Muneaki Samejima

080 東京マルイ 次世代電動ガン
AKS-47

082 ニッポンの力こぶ ●写真と文／菊池雅之
第1ヘリコプター団&西部方面航空隊
年頭編隊飛行訓練

086 Militaria Roundup!
U.S. Caliber.30 M1ライフル
（M1ガーランド）Part2

096 シン・サバゲ三等兵 春の特別篇!
いざ奈良へ!
ブラック・ユニバース・エンティティーの
ルーツを探る旅!

100 トイガンニュース
●東京マルイ　ハイキャパ D.O.R
●WA　ベレッタM84FSガンブラック
●タナカ　コルトS.A.A.2nd デタッチャブルシリンダー／スチールフィニッシュ

104 5.11 TOKYO
COMBAT Recommend item Vol.4

114 第3弾! ミリタリー・ウオッチ・スペシャルプレゼント

COMBAT FRONT LINE
065 リスクコントロール通信
066 新作映画紹介 花粉症も忘れるオモロな3本を紹介!!

102 サバゲ三等兵APS
106 新製品てんこ盛り! COMBAT mono
108 コラム ベトナムを遠く離れて――。文／小倉 徹
110 レアミリタリーテクノロジー
112 CIC
115 PRESENT
125 MOVE9周年イベント BBジャンボリー開催
126 バックナンバー
127 奥付&次号予告

第一次世界大戦に登場して以来、
瞬く間に戦場の主役に躍り出た航空機だが、
航空機同士の空中戦は第二次世界大戦をピークとして
朝鮮戦争以降はジェット化に伴って機会は減り、
多くの戦争に関わった米軍を見ても
5機以上の敵機撃墜の称号“エース”を
有する戦闘機搭乗員は、ベトナム戦争では
空海軍を合わせても5名を数えるに留まった。
その数少ないエース・ストーリーを中心に
米越の空の戦いの記録を以下、ご紹介しよう。

構成／三井一郎（航空ファン編集長）

ベトナム航空戦
MiG KILLERS

墜せしもの 墜されしもの

選び抜かれた戦闘機パイロット同士が雌雄を決する空中戦。
両者が「墜せしもの」と「墜されしもの」という立場に分かれたとしても、
それは技量や経験の差ではなく、ただ“幸運”という神の手に助けられたか、
そうでなかったかだけがもたらした結果なのかもしれない。

イラスト／橋本喜久男

F-4D (66-7463)

米空軍チャールズ B. ドベルビュー大尉乗機
第18戦術戦闘航空団・第44戦術戦闘飛行隊所属時

MiG-21PF (4326)

北ベトナム空軍グエン・バン・コク使用機

F-4D（66-7463）は、ベトナム戦争におけるアメリカ側のトップエース、チャールズ B. ドベルビュー大尉の乗機として有名な機体である。

ドベルビュー大尉は、タイのウドーン空軍基地の432nd TRWに所属していた当時、6機のMiGを撃墜し、トップエースの座についた。彼は、WSO（兵装システム士官）としてトリプルニッケル、555th TFSに所属しており、最初にMiGを撃墜したのは、1972年5月10日のことであった。その時のパイロットは、後にアメリカ空軍初のエースとなったリチャード S.リッチー大尉で、撃墜したのはMiG-21であった。

その後、2ヵ月ほどMiGの撃墜はなかったが、同年7月8日、ふたたびリッチーと組んだドベルビューは2機のMiG-21を撃墜し、スコアを伸ばした。そして8月28日、ふたたびリッチーとともに出撃、MiG-21を1機撃墜して合計4機。なお5月31日にもL.H. ペティー大尉と組んでMiG-21を撃墜していたリッチーは、この撃墜でベトナム戦における空軍初のエースとなった。

そしてエースとなったリッチーは、その功績を認められ、本国に戻ったが、その後もドベルビューはウドーンに残り、約2週間後の9月9日、J.A. マーデン Jr.大尉と組んでMiG-19を2機撃墜した。そしてドベルビューは、この撃墜によってリッチー、ファインスタイン両大尉に続き、空軍3人目のエースとなるとともに、トップエースの座についた。

F-4D（66-7463）は、このうち最初と4、5、6機目のMiG撃墜に使用されたもので、ウドーン時代のテールコードは“OY”、ユニットカラーはグリーンを使用していた。

その後、555th TFSは、最初のF-15飛行隊となるべく、アリゾナ州のルーク空軍基地に移動、463も同じタイのウボン空軍基地の8th TFW、ウルフパックに移管された。

8th TFWでは、463は435th TFSに配属され、テールコードも“WP”に変更された。そしてその後、同じ8th TFWの25th TFSに移管され、グリーンのユニットカラーを使用した。

しかし、1974年暮れ、ベトナム戦線の縮少にともなって、8th TFWは、ウボンから韓国のクンサン基地に移駐することになり、463はふたたび古巣のウドーンに配属されることになった。ウドーンで463を受領したのは、432nd TFW（1974年6月1日、TRWより改称）傘下の13th TFSで、機体には432nd TFWを表わす“UD”のテールコードと、13th TFSを表わすブルーのユニットカラーが施された。また、垂直尾翼先端のユニットカラーの中には、白で猫の足跡が書き入れられ、機種の左側面にも猫の足跡と、13th TFSのニックネームである“The Flying Pussys”の文字が白で書き込まれた。

その後、1975年6月にベトナム戦の終結によって432nd TFWは解散することになり、使用機は沖縄の嘉手納基地に駐留する18th TFWに移管されることになった。そして463もウドーンを離れ、嘉手納の18th TFWに所属する44th TFSに配属された。

上イラストは、その44th TFS時代のもので、1975年11月から1978年春までの時期に使用されていた塗装である。テールコード“ZZ”は、嘉手納の18th TFWを表わすもので、垂直尾翼先端、インボード・パイロン先端、ドロップ・タンク先端に塗られたブルーのユニットカラーは、44th TFSを表わすものである。また機首側面には、13th TFS時代の名残りである猫の足跡と“THE FLYING PUSSYS”の文字が見られる。またイラストには書かれていないが、尾翼にはPACAF、インテイク側面には18th TFWのインシグニアが書かれるのが正式のものである。

左側インテイクのベーンに書かれた、463の特徴ともいえる6個の赤い星は、配置が何回か変更されたものの、ウドーンの555th TFSに所属していた当時から、ずっと書き入れられているものである。また1979年の初めには、一時期星が5個になったことがあったが、夏にはふたたび6個に戻っている。

その後、463は44th TFSがF-15への機種改変作業を開始したことから、同じ18thTFW傘下の12th TFSに移管され、ユニットカラーは黄色に変更された。また、ベーンの星も左側だけでなく、両側に6個ずつ書き入れられた。

しかし、この12th TFSも、F-15への機種改変作業を開始したため、463は555th TFS当時の塗装に戻され、コロラド州コロラドスプリングスにあるエアフォースアカデミーで永久保存されることになった。

MiG-21PF（4326）は、北ベトナム空軍のトップエース、“トーン大佐”の乗機と信じられていた機体である（下イラスト）。同大佐は、このMiG-21（4326）のほかに、MiG-17（2613）も使用機としたと言われ、どちらの機首にも13個の撃墜マークが書かれていた。ただし現在では、“トーン大佐”は米軍が創り上げた架空の北ベトナム空軍パイロットだったということで話は落ち着いており、この4326は9.5機の米軍機を撃墜した北ベトナム空軍のトップエース、921連隊のグエン・バン・コク（階級不詳）が1967年11月18日に米空軍F-105を撃墜したときの乗機だったことが分かっている。同時に13機の撃墜マークも、連隊のほかのパイロットの戦果を合計したものであることも確認されており、そのなかには米空海軍もおよばないハイスコアのエースパイロット数名が含まれているという。

なお現在、ハノイのベトナム防空・空軍博物館とホーチミンシティの南部空軍博物館に2機の「4326」が展示されているが、後者は塗装のみで、実際の使用機である確証はない。

MiG-21のバリエーション

MiG-21
MiG-21の初期量産型は“フィッシュベッドA”と呼ばれ、推力11,240ℓbのツマンスキーRD-11ターボジェット・エンジン1基を装備していた。

MiG-21F
MiG-21シリーズ最初の量産型で、レーダー装備を持つ昼間用迎撃機である。

MiG-21PF
MiG-21Fの次の生産型シリーズ。Pは全天候迎撃を意味している。

MiG-21FL
MiG-21PFシリーズ（後期型）の輸出型で、ソ連で海外軍事援助用として200機生産された。

MiG-21PFM
MiG-21PFシリーズの後期生産型でMは改造型を示しており、PFの改造型を意味する。そのほかにMiG-21PFMA、MiG-21M、MiG-21FM、MiG-21RF、MiG-21UTIなど多数のバリエーションがある。

ベトナム戦争最大のミグ狩り作戦

オペレーション OPERATION BOLO ボロ

文／西村直紀

地上からの対空火器に加え、ソ連の支援のもとに力をつけつつあった北ベトナム空軍のミグ戦闘機迎撃部隊の抵抗に手を焼いたアメリカ空軍は大規模なミグ掃討作戦「オペレーション・ボロ」を立案、1967年1月2日に実行した。空中戦に強い戦闘機のF-4ファントムⅡを、ミグの餌食になりやすい鈍重な戦闘爆撃機のF-105サンダーチーフに見せかけてミグをおびき出し“一網打尽”にしようというもので、飛び方や編隊の組み方、飛行中のコールサインだけでなく、当時F-105だけが使っていた電波発信源のジャミングポッドをF-4に搭載して使用するなど欺瞞を徹底させた作戦だった。その結果、指揮官のロビン・オールズ大佐自らの戦果を含め7機のミグを撃墜、味方の損失はゼロという成功を収めた。

LRRP

インディアナ レンジャーズ
Indiana Rangers
ジャングルを駆ける開拓者魂

ベトナムで主力部隊の目や耳となって敵地に侵入し、偵察だけでなく奇襲やカウンター攻撃も行なう。地味だが非常に危険なこの任務はLRRPと呼ばれる専門の部隊が行なっていた。LRRPはLong Range Reconnaissance Patrol、長距離偵察の略で後にLRP（Long Range Patrol）と名称を変え最終的にはレンジャー部隊となるがその仕事ぶりはいつも鮮やかで知る人ぞ知るエリート部隊だった。ベトナム戦争の影の主役となった彼らの活躍を伝えるシリーズ、今回は出自、経歴ともに一味変わった第151歩兵D中隊の物語。

by Jay Borman　構成／鈴木健太郎　コーディネート／河村喜代子

第151歩兵D中隊はベトナム戦争でレンジャー部隊となった数々の中隊の中でもユニークな経歴を持っている。というのもこの中隊の母体となった第151歩兵連隊はインディアナ州の州兵部隊でベトナムで直接戦闘に関わった唯一の州兵部隊だっただけでなくかつてこの州の白人入植者は先住民との戦いでインディアナ レンジャーズという民兵部隊を組織しており レンジャーという名にも縁が深かったからだ。ベトナム行きの命令を受けて1968年５月13日インディアナ州を発った第151歩兵D中隊（LRP）はフォートベニングやパナマのジャングル戦訓練センターなどで６ヵ月の追加訓練を受け、空挺降下技能やジャングル戦のノウハウを身に付けると第２野戦軍を支援するために12月30日に南ベトナムのロンビンに展開した。中隊の人員は将校８、准尉１、下士官兵195名で平均年齢は24歳とベトナムで戦う部隊の平均より２歳ほど上だった。隊員の士気と練度は高かったが人数が不十分だったために26名の陸軍正規兵が補充され、ベトナムの環境に習熟する訓練を第199軽歩兵旅団と１週間行なったあとD中隊との交代で12月23日に活動を停止したばかりの第51歩兵F中隊（LRP）の残留組とも１ヵ月ほど訓練を行なったのだが、スムーズな引き継ぎと任務の移行のためにF中隊のジョージ ヘックワース少佐がD中隊の指揮を取りD中隊長のロバート ヒムセル大尉が副官となる一幕もあった。D中隊の活動地域は第３軍管区戦争ゾーンDのロンカンやビエンホア、ドンナイ川やソンベ川沿いで、解放戦線の勢力圏として知られていたサイゴン北西の「鉄の三角地帯」も含まれていた。69年２月１日のレンジャー部隊への改編で中隊は第151歩兵（空挺）D中隊（レンジャー）と改称し、同年11月20日にインディアナ州に戻り編成解除されるまでの短い期間で538回もの表彰を受けたのだが、19個のシルバースター、123個のブロンズスター、101個のパープルハート（名誉負傷章）など授与された勲章の数でも群を抜いており D中隊は1969年の１年間に最も多くの勲章を授与された中隊となった。D中隊の偵察チームは１人のM60機関銃手を含む５人編成が基本で後にチューホイと呼ばれる敵から転向したベトナム人スカウトが加わった。また中隊にはニャチャンのリーコンドースクールでリーコンド一課程を修了した者もいた。

D中隊の隊員が着用したスクロールとSSIでスクロールは151ST INF D COの表記がある。SSIはD中隊と同じロンビンに司令部を置く第２野戦軍のものを付けていた。

身を潜めるフォークス軍曹。ブーニーハットの通気穴からぶら下がっているのは手榴弾の安全ピンで、戦地のおしゃれとして偵察隊員や一般歩兵の区別なく行なわれた。

無線交信中のフォークス軍曹。軍曹が着ているのは南ベトナム海兵隊のタイガーストライプ迷彩服で、肩や肘の補強布など南ベトナム軍の戦闘服に良く見られるディテールを備えている。

C-4爆薬で食事の湯を沸かすカーチス ヘスター軍曹とRTO（無線手）のピリー フォークス軍曹。火傷防止のためかキャンティーンカップの取っ手にナイフを差しているのが面白い。ビニール袋に入っているのは長距離偵察用のフリーズドライレーションである。迷彩服はERDL、タイガーストライプともにうまく背景に溶け込んでいる。

M16をチェックするサル ロメロ。タイガーストライプジャケットの右胸にはネームが無いが、左胸にはアーミーテープと空挺章、そして歩兵戦闘章がく付けられている。手元に見えるオリーブグリーンの三角巾にも注意。

姿勢を低くして敵を待つ。身体の下にポンチョライナーを敷き、弾薬も地面に触れない様にしている。

サルのM16はダストカバーが開きトリガーに指がかけられていて臨戦態勢であることがわかる。首元に光るのはドッグタグではなく私物のペンダント。

防御体勢を整えた後に休憩を取るサル。M79グレネードランチャーの脇には40mmグレネードとM16ライフルのバンダリアが見える。

クレイモア地雷をチェックするベトナム人スカウトのドン バン タン。彼が着ているタイガーストライプは茶色味の強い独特のパターンで数あるタイガーストライプ迷彩の中でもかなり珍しい。

鋭い視線で周囲を警戒するヘスター軍曹。この写真を見ると短いブーニーハットが視界を遮らず偵察隊員に好まれたのが良く分かる。

M16を射撃中のヘスター軍曹。発射煙と飛び散る薬莢など臨場感溢れる写真である。私物の革製時計バンドはファッション性が高いだけでなくかぶれ防止にも役立ったのでベトナムで人気のあるアイテムのひとつだった。

第6回

サイゴン物語
Saigon Memories
黄色のしゃれた地獄

「ハノイ ヒルトン」それは、ベトナム戦争時代に
北ベトナム軍につかまったアメリカ軍捕虜たちが
高級ホテル「ヒルトン」になぞらえてつけた。
自分たちがチェックインすることになった
獄舎はベトナム語では「ホアロー」だ。
始まりはベトナムを植民地にしていたフランスが
建てた黄色い獄舎「メゾンチェントラーレ」にある。
合計3つの名前を持つしゃれた建物の内部は地獄だった。

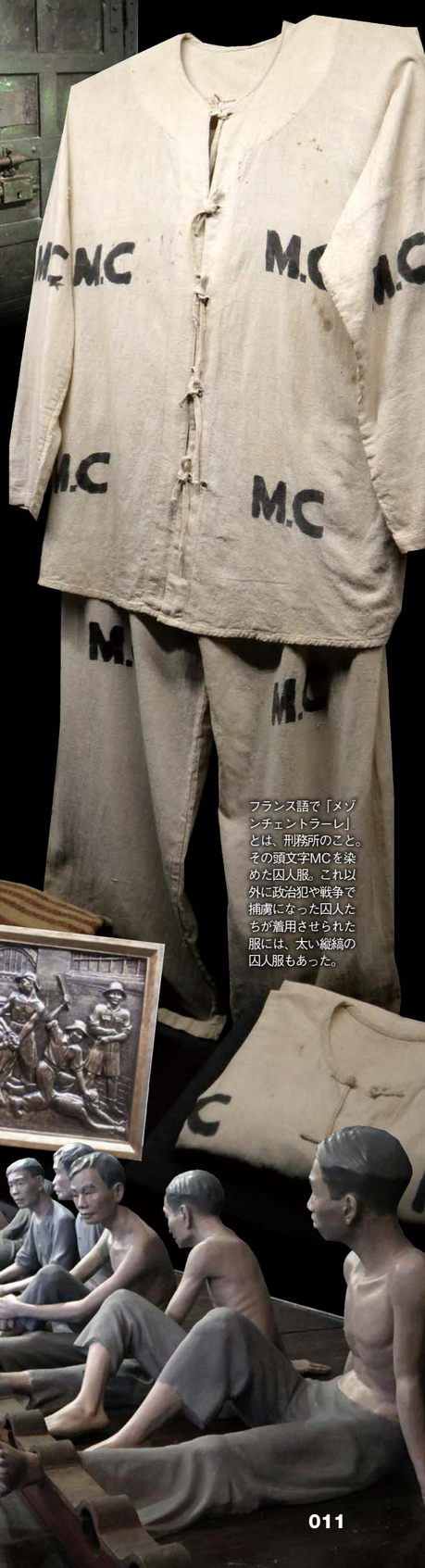
文／コンバットマガジン編集部　Text/CM Editorial Staff
写真／今井今朝春、WPPコレクション
Photo/Kesaharu Imai, WPP Collection

Hoa Lo Prison

Hoa Lo Prison Museum
住所：1 pho Hoa Lo, Tran Hung Dao, Hoan Kiem, Ha Noi 100000, Vietnam
電話：243934 2253
開館時間：08:30-17:00
休館日：不定　入館料日：30,000 VND

ホアンキエム湖とハノイ駅に挟まれた真ん中あたりにホアロー プリズンがある。商業地区はこのあたりを核にして発展してきた。現在は、旧市街と呼ばれて観光客が必ず足を運ぶエリアになっている。

複数ある雑居房のうち一つが、囚人マネキンを使った展示になっている。囚人は片足、もしくは両足を足枷にはめられている。



「ハノイヒルトン」とは、ベトナム戦争中に、捕らえられここに収容された米軍捕虜たちがつけたあだ名だ。もちろん、アメリカが誇る最高級のホテルにひっかけた、皮肉まみれの命名である。ベトナム語での名称は「ホアロー」だ。入口にある「メゾンチェントラーレ」とはフランス語で監獄という意味になる。

ハノイは南北を隔てる軍事境界線の北緯17度よりさらに北の北緯21度にある。したがって、「ハノイヒルトン」にチェックインするなら、選ぶルートは空路になる。自発的に地上に降りたがる米軍兵士はいないから、強制的な着地が必要になる。地上に降りることは即、敵地のまっただ中にいることを意味する。つまりPOW、戦争捕虜となるのは時間の問題となる。後に政治家に転身する米海軍のジョン・マケインは、「ハノイヒルトン」に5年も長期滞在した。

フランス語で「メゾンチェントラーレ」とは、刑務所のこと。その頭文字MCを染めた囚人服。これ以外に政治犯や戦争で捕虜になった囚人たちが着用させられた服には、太い縦縞の囚人服もあった。

1951年12月のクリスマスイブの晩、死刑が決まっていた囚人たち16名が脱走した。囚人たちは、地下にある下水道を伝って脱出した。鉄柵があるところが下水道につづく入口。16人のうち、完全に逃げおおせたのはわずかに5名のみだった。

雑居房では足枷をはめられるのは片足のみの囚人もいた。本を読むことを許されたり、囚人同士が話をすることもできた。規則を破るなどして、懲罰房に入れられたら、会話をするどころか、拷問が待っていた。その様子が銅板のレリーフに描かれている。

2019 SHOT SHOW

Photos&Text by Muneki Samejima

世界各国から人が集まる事から各言語に対応したスタッフが受付で業務を行なっている。日本語の話せる日本人スタッフが受付に座っている事を実は僕は今年まで知らなかった。

こちらがショットショーの正面玄関と言える受付の様子。因みにこれは最終日の終わりに撮影したもので、人はほとんどいない。逆にショー初日の朝は多くの人でごった返している。

2019年もショットショーの時期がアッと言う前にやってきた。毎年1月に開催される世界最大規模の銃器見本市と呼ばれるショットショーは銃器業界のお正月と言えるかもしれない。ここで各メーカーは、顧客との取引、挨拶回り、何より新製品のお披露目に力を入れる。

さて、僕はメディア関係者としてバッチを取るのだが、その審査が毎年厳しくなり、昨年に関しては、いつもなら届く出席登録案内のメールも来ず、危うく手続きの締め切りを過ぎてしまうところだった。今年は審査に昨年通っているので、案内メールの受け取り、バッチの発行手続きはスムーズに進んだ。因みに昨年以降、世間一般のニュースを報道する事が主な通常のメディアは入場を許されない。ショーへの入場許可を受けるには、「銃器業界との関りがあるメディア」である事を証明しなければならない。そして今年からは会場の受付にて、運転免許証やパスポートなどの身分証明書を提示した上で、バッチを受け取るシステムとなった。メディア・バッチは、昨年までは郵送で受け取るオプションもあったのが、これが廃止された。これにより、誰かに成りすましてメディア関係者として入場する事ができなくなった。聞くところによると、バッチ申請者本人ではない人物が郵送されたバッチをそのまま首から下げて会場に入るケースが多くあったようで、それを防ぐための処置のようだ。確かにバッチには顔写真が貼ってあるわけではないので、昨年までは会場の入口でバッチを見せるだけで誰でも入場できた。その点、今年からは少なくともバッチを受け取る際には、身分証明書を使用して本人確認が受付で行なわるようになったわけだ。とは言え、本人確認を受けてバッチを受け取った人物がそのバッチを誰かに貸与してしまえば、誰でも入場出来てしまう点は変わりないのだが……。

まあ、それはともかく、ショー初日に会場入りして感じたのが、「……？　何だか例年に比べると人だかりが減ったか？」と言う事だ。例年だと、ショー初日の会場は、人だかりでごった返しており、写真撮影などはマトモにできる状況ではない。撮影の仕事がもっとも進むのは2日目以降だ。それが今年に関しては、各製品の撮影が初日にも関わらず、作業がやり易かった。この印象を受けたのは、僕だけではなかったようで、友人や知人ともこの話題で話をする事が多かった。昨年以降、ショーの入場者数は発表されていないので、数字による差は不明だが、バッチの発行手続きの厳正化の影響だけではなく、銃器業界全体のビジネスはここ数年のバブルを終え、ややスローな流れ（景気停滞）となっている事がショーの来場者数にも影響を与えているようだ。実は、この流れはトランプ大統領の影響と言える。銃規制に消極的な共和党の代表が大統領と言う事で、駆け込み需要がなくなったのだ。銃規制に積極的な民主党が政権を握ると銃器業界が好景気になると言うのは、何とも皮肉な事だが、今のこの状況は大手メーカーのブースが縮小された事にも表われている。そんな様子だった今年のショットショーだが、今月は各有名メーカーの新製品を中心にショーの様子をご紹介したい。

TOYGUN REPORT

東京マルイ

Photo&Text by Tomo Hasegawa
㈱東京マルイ☎03-3605-3312
http://www.tokyo-marui.co.jp/

AKS-47

NEXT GENERATION AUTOMATIC ELECTRIC GUN SERIES

命中精度が高く、タフで壊れにくい。アサルトライフルとして高い完成度でその名を轟かせる“AK47”。そのフォールディングストックバージョンが次世代電動ガンで新登場!!

金属製レシーバーに“デフリックコート”を施す事で、スティール削り出し&黒染めの質感を再現。別パーツの金属製ピンや各部パーツなど、異素材&異仕上げによるコントラスト豊かな美事な金属ハーモニーを魅せる。金属フェチでなくても、観る者を惹きつける。

●全長:875㎜
●銃身長:300㎜(インナーバレル長)
●重量:3,155g
(空マガジン、バッテリー含む)
●装弾数:90発
●バッテリー:8.4vニッケル水素1300AmミニSバッテリー
●価格/発売時期:未定

TOMOは今回が初めてなので、新鮮な気持ちでレポート。改めてその魅力を探っていきます!

東京マルイ 次世代電動 AKS-47

東京マルイ製最新モデルが登場。次世代電動ガン“AKS-47”だ。

一昨年末に次世代電動ガン“AK-47”が発売。はやくもフォールディングストックバージョンがラインナップされた。

もともと旧ソビエト軍の空挺用に作られたものだが、車載用から標準的な兵士携行用として、コンパクトさから幅広く使用されたモデル。タフで壊れにくく、命中精度も高い。優れたアサルトライフルとして、特徴的な外観を含め、魅力的な1挺だ。

次世代電動ガン“AK-47”が既発売なので、楽しんでらっしゃるユーザーも多いはず。しかしながら、

リアルな金属感

まず驚かされるのは外観。

一見、黒一色だが、光の当たり方によって、焼き鉄色や青みがかった黒など、それぞれ鮮やかなガンメタルのトーンを発色、気分を盛り上げてくれる。金属製のレシーバーを採用し、ピンなどの周辺パーツも金属製で別パーツ再現。これにプレス製のレシーバーカバーやマガジン、トリガー周り、そして金属製ストック、それぞれが異なる金属素材感を発揮。美事なハーモニーを奏で、目に飛び込んでくるのだ。

とくに注目はレシーバー。アルミダイキャストパーツに“デフリックコート”で、黒染めされた鉄の質感

金属製ならではのリアルな外観に、熟成の高性能メカ“シュート&リコイルエンジン”を搭載。東京マルイ次世代電動ガン“AKS-47”。折り畳みメタルストック採用の“コンパクト”AK。世界最高の性能が魅力!

次世代電動ガンシリーズの初号機“AK-74MN(左:2007年12月発売)”、AK-47(2017年12月発売)、そして待望のAKS-47(中)が次世代電動ガンで登場。右はスタンダード電動ガンAK47(好評発売中)。

製造部署の確認刻印など、細かい部分もリアルに再現。斜めの打痕で掠れたような刻印など、凝ったリアルさから開発スタッフの好き者具合が窺い知れる。